

第2回「一流・本物と未来を語る居酒屋懇親会」参加者レポート

2008年4月3日(木)佐藤のりゆき氏(北海道初のフリーアナウンサー)を主賓に迎えて



「人にどう思いますかと尋ねる前に、まず自分の意見を言う。」

「個性を光らせる、可能性を広げる」

経営学部3年 AH

初めに、今回このような機会に参加出来たこと、お忙しい中お越しいただいた佐藤のりゆきさん、この会を開いてくださった菅原先生に感謝します。普段お会いすることの出来ない方と接することができ、自分自身にとって良い刺激となりました。

佐藤さんは2時間半という短い時間の中で、テレビ局に入社した時のお話や、番組についてなど、盛り沢山に貴重なお話をして下さいました。また、気さくで人当たりの良い人柄がとても印象深かった。

全体を通して佐藤さんの言葉には伝わるものがあると感じた。そして、私が佐藤さんをととても尊敬したことがある。それはいろんなジャンルに精通しているということだ。仕事柄偏った情報収集はしないのかもしれないが、私たちが振るどんな話題にも、誰よりも詳しくお話をしていたのではないだろうか。佐藤さんは、「人に伝わるように話すためには、誰よりもそのことを知っていなければいけない。自分がよく理解していないことを話しても、それは相手には伝わらない」と仰っていた。やはり言葉を扱う仕事をしていると、仕事以外でも普段からそういった気持ちが行動として表れるのだなと感じた。そういった素晴らしい部分を教えてもらい、私もこれから心掛けていかなければいけないと思った。最近

の世代は、興味のないことには一切見向きもしない傾向にあり、私もその一人である。自分に関係のないことには興味を示さず、関りたくない人には関らない。それが今の時代である。しかしそうではいけないということを学んだ。

私が今回参加して導き出したものは、普段接することのない方々と接するという事は、自分の周りの人たちより、差をつけることができるということ。まず、ゲストの方と会う前に、その人に関連する情報を予習しなければいけない。そこで普段気にとめていない情報に関心を持つことが出来る。次に、実際にお話を聞くことで、自分自身の情報となり、また一つ自身のキャパシティーが広がると思うのだ。キャパシティーが広がれば、詰めることも引き出すものもより多くなる。そういった意味で、自分の周りの人たちより、差をつけることができると思う。こうして考えれば、自分がいかに狭い世界で生きていたかに気付かされる。

佐藤のりゆきさんが何千人と申し込むアナウンサー採用試験に合格することが出来たのはどこか光る個性を持っていたからだ。これからは自分の世界で生きるのではなく、色々なジャンルで学び、それを吸収して自分のものにし、最後は個性として発揮できれば、その中からどこか光るものを見つけられるのではないだろうか。そういった可能性を広げることが大事だと、私は考える。

「一流とは」

経営学部2年 Y S

4月3日、実際にお会いした時の佐藤のりゆきさんの第一印象は、一般人とは違うオーラがあった。今まで「一流」とされる人物と接する機会がほとんどなく、これが「一流」の人物だというのが一瞬で伝わってきた。「一流」とされる人物と接する機会がほとんどなく、と記したのは過去に2度接する機会があったからだ。

1度目の出会いは、小学生の頃にプロ野球選手との出会いの時のこと。当時から有名であり、後に大リーグで活躍した選手である。何人かのプロ野球選手の方と接する機会があったが、一人輝くものが子供ながらに感じられていた。

だが、当時はどこが他の選手と異なっているのか、はっきりとはわからなかった。実力の差、メディアでの報道の差、これくらいしか考えていなかった。しかし今、のりゆきさんとの出会いではっきりとした。そのことは3つある。1つ目は、聞き上手であること。2つ目は、ファン・視聴者を大切にすること。3つ目は、他の人にはない自分だけの武器を持っていること。この3つは両者から共通して感じられた。

この3つのことをのりゆきさんに焦点をあてていくと、1つ目の聞き上手であること。話しのプロとしては話しが上手なのは当たり前かもしれない。そのことによってただ自己主張ばかりをするのではなく、のりゆきさんは相手が話しやすいよう引き出して話しをしていく。自分が一流だからといって他人のことを卑下することなく、良い意見であれば素直に自分のものにしていくことも大切であると実感した。

2つ目のファン・視聴者を大切にすること。このことも、プロとしては当然のことかも

しれない。ただ、サインを求められたからサインをしたということではない。放送内容を適当に話題になりそうな放送をするのではなく、視聴者の立場に立った、視聴者が本当に求めている内容を提供しようとする姿勢が本当にファンを大切にしているのである。情報をインターネットで取り上がっている問題から収集するのではなく、実際に起こっている問題から収集するというように取り上げる。このような視聴者に対する気配りも一流といえる。

3つ目の他の人にはない自分だけの武器を持っていること、これが一番「一流」になるために大きな部分を占める。のりゆきさんの場合であれば上記の1つ目に記した「聞き上手」ということが他の人が持ち得ない武器であると感じられた。

今回、のりゆきさんとの懇親会で得たのがこれだけという訳ではありません。しかし、自分が未熟であるために得られることを得られなかった部分が多くあった。得られたはずのものを逃すということはもったいないことなので、このような機会を逃すことなくしていくことが大切である。

最後に、「一流」の人物との2度目の出逢いは言わずとも菅原先生との出会いです。

「一流に接して感じた事」

経営学部2年 Y T

まず、今回ののりゆきさんとの食事は楽しただけではなく、のりゆきさんからいろんなことを学ぶことができるとも感謝しています。

今回ののりゆきさんが話していたことの中で、大切に感じたことが3つあった。

1つ目は古くなったものは捨てるということ。古くなったものは捨てて、常に新しいものを作りだすことの大事さは去年のゼミで何度も学んだが、今回ののりゆきさんもそれを大事にしているということを知ることができたと思った。

2つ目は自分の意見を言う大切さだ。のりゆきさんは様々な問題や相談に対してまず自分の意見を言うことを大事にしているとおっしゃっていたが、確かにのりゆきさんのように自分の意見をテレビで言っている人は少ない。他のアナウンサーさんがやっていないことを大事にしている、つまり人と違うことをしているというところに“一流”を感じた。また、これが『のりゆきのトーク DE 北海道』が長く愛され続けている秘密の1つだと実感した。

3つ目は人にはないものを伸ばすということだ。のりゆきさんは他の人とは違う何かを見つけそれを伸ばすこと、それが自分を光らせるものとなるとおっしゃっていたが、まさにそれこそが自分に重要なことだと感じた。また、のりゆきさんの話を聞いて、仕事はやりたいたいという意思がとても大切だということを知った。のりゆきさんのようにアナウンサーの最終選考まで残って最後に2つの試験が重なったら、どちらかを諦めるのが普通だ。また、もし自分がそのような立場になったらどちらかをあきらめると思う。

今回の懇親会は短い時間だったとは思わせないくらいに大切なことを学べたと思う。そこから一流と言われる人に接することは自分にとって新しい発見があると実感した。自分で

もできるだけこれからそのような人とたくさん話して自分を磨いていきたい。そしてせっかく今回のような会を開いてもらえるというチャンスがあるのでこれからも積極的に参加したいです。

「キラッと光る」

経営学部3年 NY

今回、佐藤のりゆきさんと直接対談してみて、テレビを通して持っていった印象が少し変わりました。正直に言うと、お会いするまでは”北海道のみのもんだ”のような印象で、説教っぽく意見が偏っている印象がありました。どちらかというところ“今の若者は・・・”と言う大人の一人かと思っていました。しかし、実際話してみるとそんなことはなく、感覚の若い人だと感じました。自分の両親よりも年上なのにも関わらず、壁がなく親しみやすかったです。私は、この会(一流の人達との会)に出席するのは初めてだったのですが、やはり群を抜いた人というのは、人と違うのだと肌で感じる事ができました。

のりゆきさんのお話で特に印象に残ったのは、菅原先生がよくお話しになる“光る”ということでした。のりゆきさんは、アナウンサーになるために大学在学中に東京のアナウンサー学校に通い、全国の放送局を片っ端から受けたと言っていました。私は、これだけでも行動力があると尊敬してしまうのですが、きっとここまでは、全国に同じように努力する人が数え切れないほどいて、その中で光るのは難しいでしょう。

のりゆきさんが2社の最終面接の日程がかっぶってしまった時に、会社まで出向き交渉したことが運命を大きく変えたことは間違いありません。私は、この話を聞いた時に、大物になる人はこういうところが違うのだと再確認させられました。こういう思い切った行動や(本人にとっては普通なのかもしれませんが・・・私から見ると凄いです)、人と違うことをするという事はリスクも伴いますし、決して楽な道ではないと思います。日本では“出ている杭は打たれる”ということわざがあるように、群衆に紛れている方が無難という風潮があるように思います。

しかし、のりゆきさんの実体験からも分かるように、チャンスは自分で作っていくものであり、与えられるものではないのです。打たれることを恐れているのは、自分をアピール出来ないし、“光る”なんて不可能です。私に欠けているものは、度胸です。幼い時から分かっていたことなのですが、改善できていない点であり、私のこれからの人生を大きく左右する程の欠点だと思います。のりゆきさんは「他人より光るにはどうしたらいいか」という質問に対して、「何か一つでもいいから、それを極める為に我武者羅に努力しているうちに、それが他人から見たときに“光る”のではないか。」と答えました。この言葉が今回私の心に一番残りました。

“光る”為には、人一倍の努力+私に欠けている度胸が必要なのだと今回ののりゆきさんとの対談で学びました。私は今年、出来るだけスキルの高い資格を沢山とります。就職に向けて今年が頑張りどころだと思うからです。ここで人一倍の努力をし、そして度胸は菅原先生のゼミで鍛えよう・・・と改めて思いました。

「一流・本物居酒屋懇親会に参加して」

経営学部 2 部 3 年 C K

トーク D E 北海道のさとうのりゆきさんはとてもさわやかな紳士でした。

T V 番組を作るときは、実際の生活の中におきている問題点を常に探して、アンテナを高くされている。過去形ではなく、現在進行形なのだ。インターネットでの情報ではなく、自分の目で見て、聞いて本物の情報を見つける。というやり方にこだわって、丁寧に番組を作っている。そして、はっきり物を言ってお茶の間の人気をつかんでいる。T V の前では常にご自身の考えを述べ、視聴者に問題を投げかける。そうされると、視聴者も今現実には起きている問題に向き合い一緒に考えてしまう。一方通行ではなく。

この日、一番印象に残ったのは、のりゆきさんが、人に「どう思いますか？」と尋ねる前に、自分の意見を言うことの重要性である。影響力の大きさは充分にご存知であるが、あえて問題提示する、考える題材を投げかける、そういったことで、世の中の出来事を多くの人に知ってもらい身近に起きていることを認識してもらい、何事にも関心を持ってもらいたいという思いが込められているように感じられた。

学生たちの質問に対しても真剣に答えてくれた。ひとつひとつ言葉を選んで、丁寧に答えて下さる姿は、キャスターとしての仕事にも感じられる、裏表のない誠実さを感じた。とても、まっすぐできらりと光るまなざしは、何事にも真剣に取り組む姿勢が感じ取られ、一流の人とはこういうことなんだ。と感じた。コミュニケーションのとり方も抜群にうまい。誰にでも公平に目を配り、その場の雰囲気壊さず、なごやかに話して下さる姿は、ベテランのキャスターならではなのか、生来の性格なのか、いずれにしても、番組が 14 年間続いたのもうなずける。

ほんの 2 時間ご一緒させていただいただけで、ファンになってしまった。

私もこれからは、問題意識を持ち、その問題に対して、考え、意見を述べることができるようにしていこうと思う。世の中で起きていることは、他人事ではなく、自分の問題として考えていくことは大事なことでないかと考えさせられた。

楽しい時間を与えて下さった、佐藤のりゆきさんと菅原先生に感謝している。ありがとうございました。

「一流本物と未来を語る居酒屋懇親会」に参加して

北海学園大学経営学部 4 年 M K

北海道の朝の顔と言われている「佐藤のりゆき」さんについての事前のイメージは、「はっきり、ずばずばものを言う人」でした。

懇親会では、のりゆきさんが真正面に位置していましたので、最初はひどく緊張しました。のりゆきさんは、さすがアナウンサーですね。話題が豊富です。緊張していたはずが、いつの間にか話に引き込まれて、聞き入ってしまいました。

北海道の人の話す言葉のイントネーションは共通語ではないこと。アナウンサーの世界では、標準語とは言わず、共通語と言っていること。アクセントをどこに持ってくるかが、北海道弁と共通語の違いであり、アクセントを意識して「椅子に座る」、「雨が降ってきた」と、声に出して言ってみるとその違いがわかりました。

のりゆきさんの話の中で特に印象的だったのは、相手の意見を引き出すためのテクニックです。人に「あなたはどう思いますか？」との問いを発した後で、CMを入れてしまうのは、NGである。なぜなら、視聴者はそう聞かれても困ってしまうだけである。

人に、どう思うかと聞くのであれば、「自分は、こう思うけれど、あなたはどう思いますか？」という展開にしなければ、聞かれた人の意見を引き出すことはできない、との、のりゆきさんの話で、こういうところが、のりゆきさんの番組が長く続く理由なのではないかと思いました。

はっきりものを言う人、との、のりゆきさんのイメージができあがっているのも、「自分は、こう思う。」とはっきりと自分の意見を述べているからであって、そこが視聴者に支持されているのでしょう。公共の電波で、自分の意見を述べるのは、ざっくばらんな話をしているようでも、そうとうの緊張感と頭の柔らかさが必要ではないでしょうか？

自然体で、相手の思いを言葉で引き出せるのりゆきさんは、人一倍周囲に気配りのできる一流・本物の人だということが、お会いして会話をしてみて確信できました。

北海学園大学法学部出身ののりゆきさんと同じ大学で学べることを、うれしく思いました。今後は「のりゆきのトークで北海学園」が、ぜひ実現できるように菅原先生、OB、OG、経営学部生で盛り上げていきたいです。

「ノリさんと出会った~!!!」

北海学園大学 2 部経営学部経営学科 2008 年卒業 KO

昨日はとても楽しい時間を過ごさせていただきました。根っからのテレビっ子の私なので、いつもテレビで観ていたノリさんと直接お会いできて、それもじっくり少人数で話せるなんて、夢のような時間でした（笑）。ノリさんのお話はどれも楽しく、興味深いお話ばかりで、HBC に入社されたときの武勇伝・番組の作り方・政治や経済・テレビ業界の裏側（秘）などなど、2 時間があっという間でした。

中でも印象に残ったのが、番組で話をするときが一番心がけていることはなんですか？という学生の質問に、相手が理解できる言葉で伝えるようにしているというお答えでした。今の年金問題や政治問題を取り上げて、国に不満がある、どうしたら良くなるのか？と視聴者さんに向かって「どう思いますか？皆さん？」と質問を投げかけるならば、「自分はこう思う」と意見を言ってから、視聴者さんの意見を聞くと話されていました。

あと、日本語で一番キレイな言葉が「ありがとう」で、「ありがとう」とたくさん言える人は外見的にも美しいと。私も今日から「ありがとう」を連発します（笑）。挙げればキリがないほど、楽しいお話を聞くことができ、昨日は興奮状態でした。本当にありがとうございました。

最後に菅原先生がどうすれば北海学園大学が発展するか、盛り上げられるかをみんなで話し合った結果、「のりゆきのトーク DE 北海学園」という番組を作るということになりましたね。是非是非実現させたいと！その節はレポーター？ディレクター？コーディネーター？なんでもやります！おまかせください（笑）！

追伸・・・ステキなお宅にも、遊びに行かせてくださいね！まずは次回、菅原先生番組出演時、見学に参ります。

ほんとうに ステキな時間を ありがとうございました

「学んだこと3点」

経営学部3年 HK

先日佐藤のりゆきさんとお会いして私を感じたことは、14年間も同じトーク番組を続けていられるのには理由があるということです。のりゆきさんの話し方、人との接し方はやはり、一般の人とは違う引き込まれるものがありました。これからそのポイントを3つにまとめたいと思います。

第一に、のりゆきさんは全員に向かって話しているような印象を受けました。基本的なことですが、一人一人平等に目を見て話していて、どんな話をしていても一人に偏ることはなく、全員と会話をしていました。その結果、全員がのりゆきさんは自分に向ってきちんと話している、という印象を受け、自分も話をきちんと聞くという姿勢になっていたと思います。きっと番組を司会している時もそのように話をするので、テレビを通してみんながのりゆきさんの話に引き込まれるのだと感じました。

第二に、のりゆきさんはテレビで見ていた印象ですと、毒舌で少し冷たい印象がありましたが、実際に会ってみるとすごく優しくて柔らかな印象を受けました。テレビの上では、あらゆる問題に対し冷静にコメントをするキャラクターなのかもしれませんが、やはり普段の姿は、スタッフや周りの人に対しても丁寧に礼儀正しく接することができるからこそ、長い間同じ番組を続けていけるのだと思います。

最後に、のりゆきさんは私たち大学生の話でさえちゃんと話を聞き、興味を示していました。常にみんなは何を考えてどんなことをしているのか、私たちの身近な事件に興味を示しているのは、テレビに出てコメントをするものとして、色んな情報を頭に入れておく必要があるからかと思いました。それと同時に、どこかに番組のネタがないか常にアンテナを張り巡らせ、ペット詐欺話など、ちょっとした話にも何かおもしろいネタはないか探していて、テレビを作る人が世間に目を向け、身近な事件を取り上げてくれるので、私たちが身近に感じられる視聴者に共感を得られる番組ができるのだと思いました。

今回、佐藤のりゆきさんというアナウンサーとして成功している人の意見やお話が聞け、その人との接し方を見て、とても勉強になりました。